

英国における EAP (English for Academic Purposes) 教育と教材作り

吉重美紀*

はじめに

英国 EAP 大学教師協会 (British Association of Lecturers in English for Academic Purposes: BALEAP) の理事 Olwyn Alexander 教授との出会いは、「運命的」とも言えるものであった。本学体育大学の学生を対象とし、ESP (English for Specific Purposes) 教育の視点から英語教材を作りたいと常々思っていたのだが、今年7月31日から8月15日までスコットランドのエジンバラで研修の機会を得ることとなった。当初予定していたエジンバラ大学の教員対象 ESP コースの一つ EMP (English for Medical Purposes) が申込者不足により開講されないと連絡が入ったのが6月末で愕然とした。が、幸いインターネットで BALEAP のホームページに行きつき、エジンバラ在住の理事 Alexander 教授にメールで事情を書いたところ、その日のうちに「informal な形ででも大学で何かできないか検討してみます。」との返事を頂き、教授の所属するヘリオット・ワット大学で受け入れ研修させて頂くこととなった。大学宿舎に滞在するには、大学が開講する夏のコースを履修する必要があったため、午前9時から午後4時までは英語上級コースに入り、日常仕事で英語を使用する翻訳家、通訳、弁護士、EU 経済学者などヨーロッパ各地から集まった受講者12名と共に学んだ。コース終了後、図書館で午後8時の閉館時まで ESP/EAP 関連の図書、文献を収集し宿舎に戻って読む毎日だった。翻訳/通訳コースと運動・スポーツ科学学部があったため、英語教育とスポーツ科学関連の図書は豊富に揃っていた。

ここでは主に、経営・言語学科 Olwyn Alexander 教授の研究室を訪問し、お話し頂いた EAP 教育と、運動・スポーツ学科 Derek Ball 学科長をお訪ねし話し合った本学との交流協定締結の可能性について、概略をご報告したい。

Alexander 教授訪問

Alexander 教授の訪問では、現在教授が行なっている EAP (English for Academic Purposes) 教育について、BALEAP の資料や教授が最近出版された EAP テキスト “Access EAP FOUNDATIONS” Course Book 1 を頂いた後、話をうかがった。教授は20年近く EAP 教育に携わっており、以前はヘリオット・ワット大学でも教員向けの EAP 教授法コースを開講していたそうだ。そのエッセンスは “EAP Essentials: a teacher’s guide to principles and practice” にまとめられているので参考にしたいと言われた。BALEAP には現在英国内80以上の大学が加盟し、インターネットや学会等を通して様々な情報交換を行なっているそうだ。「日本では、EAP より一般に ESP 教育だ」と私が話すと、教授はその違いを ESP は学習者のその後の「仕事」に焦点を置くが、EAP は「大学での研究」が主で英国では EAP を使用すると言われた。教授も大学で修士課程1年次の学生を対象に、学生の6つの専門分野別に週に2時間1学期に EAP 教育を実践されている。授業では言語面だけでなく、学生それぞれの専門分野で本当は学生のためになる事を教える必要があると強調された。そのためには、専門分野の教員と協力して教

*鹿屋体育大学外国語教育センター

材を作成する必要性を説かれ、「忙しくて協力できないと言う教員もいますが、必ず協力してくれる教員はいますよ。」とのお言葉に励まされた。現在、日本の大学でも日本人学生を対象に日本語の科目が開講されてきているが、英国で英語を母国語とする学生でも、特に修士以上では、学部生と違ってこのEAP教育が必要になっている現状があるという。教授は、修士以上の学生にEAP教育を実践されていて、学部生には特に設けず、チューターを活用したり、教授を訪ねて質問させるとのことであった。教授のEAPクラスのシラバスと丁寧にファイルされた作成教材を見せて頂いたが、その一つ一つがかなりの時間を割いて選び抜かれ、また専門教員の協力のもと作成されている事がうかがえた。

振り返って、私が計画中の本学学生を対象とした英語教材作りでも、ESP以前に、まずは修士/博士課程の学生達が知っているべき又できるべき研究に必要なさまざまな能力（論文作成能力や文献を批判的に読む力など）を身につけるEAP教育を目的とした教材作りの必要性をあらためて感じた。図書館では、そのために使えそうな英文図書を数冊見つける事ができた。また今回教授に頂いた初級レベルのEAP教材は、分析して今後の教材作りの参考としたい。

またBALEAPは、他国のESP/EAP教育関連学会とも今後情報交換していきたいとの教授のお話だったので、所属する大学英語教育学会のESP研究会についても現状を紹介したが、今後の相互の協力体制についても貢献していければと思う。

Ball 教授訪問

重点プロジェクト経費を頂き海外派遣させて頂いたので、外国語教育センタースタッフとして、又留学生専門委員会副委員長として、今回の渡英のもう一つの大きな目的に、スコットランドの大学と本学との交流協定校締結の可能性を探る事を掲げて出かけた。幸い研修先のヘリオット・ワット

ト大学には、広大なグラウンドやスポーツセンターがあるばかりか、運動・スポーツ科学学科があって、その学科長であるDerek Ball教授に面会して本学との交流協定校締結について話し合いを持つことができた。

Ball教授の研究室は、まるで化学実験室のような様々な設備のある実験室の奥にあった。マンチェスターの医科系大学からヘリオット・ワット大学に移って来られ4年になると言われる教授は、主に運動と心臓血管の関係について研究されている。

現在3年次編入生としてフランスからの留学生2名が生化学を勉強しているそうだ。教授は、学生交流について考えられる問題点を2つ挙げられた。一つは、言語の問題で、向こうの学生が日本に来て日本語で講義を受ける事における問題と、本学学生が英語で専門科目を受ける問題である。もう一つは、経済的支援の問題で、スコットランドの大学では授業料は無料であるが、イングランド出身の学生は授業料を支払う必要があるため、当然日本の学生も授業料を払う必要が出てくる。経済的な支援は、British CouncilがE.U.以外の国との連携を支援しているので、旅費等を含め援助を求められるかもしれないとの事。

学科には、修士/博士両課程があって、就職先としては理学療法士や生物教師、軍隊や警官など。コースはスポーツ運動とスポーツ心理学に分かれ、モジュール制を取って学生が柔軟に時間割を組めるようになっているという。競技を主にする学生がいるのかとの問いに、「もちろん。国際的なレベルの水泳選手もいる。」が「学業面でも同様によく勉強する」とのお話だった。

その後、実験室を見せて頂いたが、運動後の血液の分析を行なう設備や、DNAのかなり細かいレベルでの分析および拡大装置など、門外漢の私は初めて目にする装置ばかりであった。Ball教授は、実験装置など、ご自分の研究について話される時がうれしそうに誇らしげでいらした。

私の訪問時期が夏休み中であった事から、また学期が始まればBall教授が今回の訪問について

他の部署にも話をして下さるとの事であった。今回の訪問でうかがった印象としては、学生交流よりも Ball 教授らと同じ分野の本学教員の研究交流に適した大学ではないだろうか考える。幸いエジンバラ空港から車で20分以内と交通の便もいい場所に大学は位置し、カンファレンスセンターもあって、滞在中も国際学会が開催され約500名の参加者があったと聞く。現在、本学との交流協定校はアジア圏が主であり、学生達は英語圏の大学との交流協定締結を望む者が多いので、今後も本学とヘリオット・ワット大学との交流協定締結の可能性を探っていきたいと思う。



写真1 スポーツセンター正面



写真2 Derek Ball 教授研究室にて